2016 年度　政策提言ツアー　実施報告書

実施日：2017 年 2 月 21 日
意見交換：財務省（主計局）、厚生労働省
参加者：赤井ゼミ[1]学生 16 名および大学院生 1 名、引率教員 3 名（赤井・倉本・足立）

内容

１．政策提言ツアー企画の経緯 2
２．スケジュール 2
３．写真 3
国土交通省港湾局との意見交換会 3
河野太郎　前行政改革担当大臣との意見交換会 5
経済財政諮問会議経済・財政一体改革推進委員会との意見交換会 5
山本幸三　行政改革担当大臣との意見交換会 6
厚生労働省との意見交換会(大阪大学東京オフィスにて) 7
財務省訪問と意見交換 8
３．学生コメント 9
４．政策提言ツアー実施の効果：企画者のコメント 21

[1] 連絡先：赤井伸郎（大阪大学国際公共政策研究科教授）akai@osipp.osaka-u.ac.jp

１．政策提言ツアー企画の経緯

大阪大学法学部国際公共政策学科赤井ゼミ所属の学生が 2016 年度に執筆した論文（題目「持続可能な水道事業を目指して～民間活用と広域化による経営効率化～」）が、ISFJ（日本政策学生会議）において、最優秀賞を受賞した。論文において提言した政策に関して、実際に、その政策を所管する省庁に訪問し、提言を行う機会を得た。受賞した論文およびその他の班の論文は、すべて厚生労働省の政策に関わるものであり、その政策担当者と議論する機会を持つことにした。

なお、今回は、本ツアーとあわせて、ゼミで取り組んでいるもう一つのテーマである「クルーズ振興」について、国土交通省港湾局を訪問し、若者の視点から提言を行った。さらに、行政改革担当大臣および前行政改革担当大臣と、行政事業レビューのあり方に関する意見交換会や、経済財政諮問会議専門委員会を訪問し経済財政政策の提言も行った。

本ツアーに御協力いただいた多くの皆様には、学生に貴重な体験の機会を与えていただいたことに、深く感謝したい。

２．スケジュール

2月21日（火）	工程	ドトールコーヒー前（中央合同庁舎2号館と3号館の間）	国交省港湾局（中央合同庁舎3号館）	衆議院会館・河野太郎事務所（衆議院第2議員会館）
	時刻	13:15	13:30～14:30	15:00～15:30
	備考	集合	クルーズ振興策発表（代）	発表（代）
	工程	経済・財政一体改革委員会（中央合同庁舎8号館）	行革事務局（中央合同庁舎8号館）	ミスターチンズダイニング
	時刻	16:00～17:00	17:50～18:30	19:00～21:00
	備考	発表（水）	「レビューのあり方」発表（医）（癌）（水）	交流会
2月22日（水）	工程	大阪大学東京オフィス	財務省内食堂	財務省
	時刻	9:30～12:00	12:30～13:15	13:30～16:00頃
	備考	論文発表（癌）（医）（水）		論文発表（癌）（医）（水）
	大阪大学東京オフィス			
	時刻	16:00～		
	備考	終わりの会		

３．写真

国土交通省港湾局との意見交換会

2月22日
海事プレス

大学生とクルーズ振興で意見交換

■国交省港湾局、若年層の認知向上へ

大学生がクルーズ振興策や日本の観光のあり方などを議論する「スマートクルーズアカデミー」の参加者は21日、国土交通省港湾局を訪問し、クルーズ振興について意見交換を行った。国交省港湾局からは菊地身智雄局長、水谷献産業港湾課長、石原洋クルーズ振興室長らが参加した。大阪大学、東洋大学、東京工業大学の学生が、若年層へのクルーズに対する認知度向上や利用促進に向けた政策提案を行った。

世界のクルーズ人口は増加傾向にあるものの、学生は「若年層にはあまりクルーズが浸透していない」と指摘。大学生など若年層への認知度を高め、利用促進を図るべきだと提案した。具体的な手法として、インスタグラムやYouTubeなどを活用したＰＲや、クルーズ船内での語学研修の実施、観光客向けの寄港地情報サイトの立ち上げなどを挙げた。

若年層への浸透に向けてＳＮＳの活用などを提案した

菊地港湾局長は「若い人のクルーズ需要を掘り起こすことは重要で、インバウンドを呼び込むことにもつながる。提案のいくつかはすぐに取り組めるものとなっており、上手く（大学と）連携して実際の政策までつなげていきたい」と話した。

国土交通省

河野太郎　前行政改革担当大臣との意見交換会

経済財政諮問会議経済・財政一体改革推進委員会との意見交換会

山本幸三　行政改革担当大臣との意見交換会

厚生労働省との意見交換会(大阪大学東京オフィスにて)

がん・疾病対策

医事課

水道課

財務省訪問と意見交換

厚労係

厚労係

厚労係、国交係

３．学生コメント

学生番号	国土交通省港湾局でのクルーズ振興の発表について感じたこと、学んだこと：: 発表・議論で得られたこと、発表の意義、今後の希望 など
1	提言にもあったとおり、今後クルーズ振興を考える点で若者層への拡大を図るのは一定の妥当性があり、行政の方も同意していたように思う。今回の提言は、まだ広がっていない若者クルーズに関して、需要サイドから供給サイドの議論には含まれないような考察（例えば、広報戦略としてYoutuberと提携を行う、SNSとの戦略的な提携などの提言）を行うことができた点で、一定の意味があったと思う。
2	いずれの大学も、現在クルーズへの乗船が少数である若年層を対象に絞っていた。若年層は、旅行するときの選択肢にクルーズが最初から除外されている場合や、また認知されていない場合が多いため、いかに選択肢に入れるか知ってもらうかが重要であると感じた。認知向上策として、ツイッターやインスタグラムなどSNSの活用などは、若年層にSNSユーザーが多いことなどから女子大生などに有効であると考えられる。
3	大学によって振興発表の視点が異なるのはとても興味深かった。その一方でどの大学においてもSNSを活用することを挙げていたため、若者に働きかけるには有効なのではないかと感じた。
4	以前のスマートクルーズアカデミーのときの発表と内容がかぶっているものも多くあったが、行政に向けて提案しているため若干違うところもあって、聞いていて面白かった。初めて実際に国の行政に携わっている人に向けた発表だったが、やはり実現性の面での指摘が学生の目線とは大きく違ったものがおおく、着眼点の違いや考え方、アプローチの違いなどに驚いたし、すごく参考になるものが多かった。
5	発表自体はすでに見たものであったため新しく何かを感じたことはなかったが、実際に実務者の方からの意見も聞くことができそちらは学べたこともあったかと思う。やはり今回は全体的にもSNS活用の提言が多くなっていたが、他にも若者を魅了するような仕組みはあるかと思う。来年度も提言を行う機会があるかと思うが、その時はそのようなSNS以外のものにも焦点を当て考えてみたい。発表の意義としては、学生にとっては実務者の方からの現場に沿った見解を知ることができること、実務者の方にとっては普段は接点が少ない若者から客観的な意見を聞くことができることであると思う。
6	どのグループの発表も参考になるものばかりだった。特に東工大の認知から購入に至るまでのプロセスは全く知らない知識で新鮮に感じた。実現可能性の高いものからはどんどん政策に反映してほしいと感じた。特にクルーズ船上のカジノなどは世間でも関心の高いものということで今後が楽しみだと感じた。クルーズに乗って楽しむだけでなく、その振興策について真剣に考え、議論する場としてとてもいい機会だと思います。
7	一月のクルーズ同窓会で他の大学の素晴らしい現状分析と発表を伺っていたので、今回また東洋大学や東工大の発表を聞けてよかった。国土交通省の方々がSNS等の施策は実現に向けた検討をしやすいものという話だったので、考えたかいがあったなあと感じた。よりフロアの人の意見も聴ける感じにしたかった。
8	どの大学もクルーズ振興に向けての切り口が少しずつ異なり、非常に興味深かったです。また、東工大の発表にあった民間に委ねることと政府がすることを分類した図は非常にわかりやすく説得的だったので、今後の参考になりました。東洋大学の語学留学とクルーズを結びつけるアイデアは、今までなかなか議論になることのなかった視点だったので、興味深かったです。既存の施策にとらわれることなく柔軟に物事を考え、結びつけていきたいと感じました。

9	クルーズアカデミーの同窓会で見た発表よりも、クルーズ振興提言の内容がグレードアップしていて、感嘆いたしました。また、発表の内容は全てがすべて政府に向けたものではなかったものの、発表全体に対して港湾局のみなさんが好意的に評価していただけたのが、とても印象的でした。私たち若年層からすると、もはやSNSであったりインターネットのサービスであったりが当たり前になりすぎて、そういうことを提案することも2番煎じかなといった気もしてくるのですが、私が思っていたよりも年代のギャップというものが大きいのだと感じた機会でした。
10	<不参加のため省略>
11	東工大の方の、クルーズでのカジノ事業のさらなる展開についての提言が面白いと思いました。 現在話題になっているIR法案は日本国民を対象とする趣旨が強いですが、私自身カジノは外貨獲得 に重きを置くべきと考えるので東工大の方の意見と合致しました。
12	アカデミーでの成果を政策担当者の前で発表することは非常に有意義であると感じた。また、発表からはクルーズ振興において民間だけでなく公共部門の役割が大きいことも身をもって感じることも出来た。現状、中国でのクルーズマーケットの拡大も相まって外国籍クルーズ船は増加傾向にあるが、国交省主導の施策がどれくらい寄与しているかの効果検証も必要であるように感じられた。今後の発表ではこの視点も盛り込むと更に価値あるものになるのではないかと考える。
13	各研究会、クルーズ同窓会での発表内容に政府への提案を付け加えており、内容がより充実したように思いました。議論については、担当者の方から「SNS等の施策は実現に向けた検討をしやすいもの」と言っていただいたことがとても印象的した。SNSの活用や法制度の改定など、今の社会の状況に合わせた対応策を柔軟に考えていくことの大切さを改めて感じました。特に広報戦略については、ターゲットに合わせて世間の生の声を取り入れることで、より効果的な策を講じることができると思います。
14	他大学の発表を同時に聞けたことで、普段とは違った視点・切り口からクルーズについて考えることができ、理解が深まった。情報収集も公務員の方の仕事ゆえ、常にアンテナは高く張っていらっしゃると思うのだが、ことサブカルや新技術などには世代間の格差が大きいと感じた。若い世代の意見が通らない、と声を上げる人もいるが、これは若い世代の考え方がそもそも理解されていないからでもあると思った。若い世代を代表して提言をしている、という責任を改めた感じる機会となった。
15	学生の発表に対して国土交通省の担当の方に意見を頂く、という形式で行わたが、主に若者をクルーズ市場に如何に巻き込むか、という点について様々な意見が登場し、よい議論になったのではないかと思う。改善点として感じる点について2点あげるとすると、まず、学生の発表を聞いて感想に近い意見を頂くことにとどまっていたため、事前に発表内容について伝え、実現に向けてのハードルについてより具体的な議論が起こればよかったと思う。また、発表内容が被っている部分もあったため。学生側で発表を効率化し、空いた時間で国交省からクルーズ政策についての話を聞けば学生にとっても大いに勉強になったと思う。
16	2年前のクルーズ乗船時に、港湾の規模や機能にかかわらず、各自治体の港湾局が競争的に振興政策を行っていることに違和感を覚えたことを思い出した。政策実施主体がそれぞれ他の政策実施主体の行動をフィックストとして政策立案を行っているように感じられるので、まずは国・各自治体で十分に調整がなされるべきであると思う。また、クルーズ振興はビジネス的要素もあるので、積極的に民間の意見や人材も活用して推進していくべきだと感じる。
17	非常に意義深かったと思う。クルーズは数少ない成長分野の一つである訪日観光のなかで重要な位置を占めるようになってきているため、今後の発展に欠かせないものであるし、学生の今回の提言はそういうクルーズ振興に寄与するものであると思われた。特にオリンピックやIR法案などを踏まえた議論は時流ともあっていて良いものであったし、確実に訪日客向けの宿泊施設が不足するオリンピックでクルーズ船を活用してキャパシティを確保するためにも税関の議論などは重要だと思う。

学生番号	河野前行政改革担当大臣との意見交換会で感じた事、学んだこと:: 意見交換会で得られたこと、大臣経験者と議論をしたことへの感想 など
1	先輩からは「パッションに溢れた方」と伺っていた通り、レビューの地方開催についても意欲的に捉え、また私たちの提言についても肯定的に見て下さった。また政治家一般に対する印象と異なり、幾分か話しやすい方であるような感じを受けた。
2	大阪大学での地方行政レビューで終わることなく来年度も地方での開催が予定されていること、既に手を挙げている団体があり、今後も続いていくことが望まれる。河野前行政改革担当大臣が、次期開催へと意欲的であるように感じた。
3	河野大臣がレビューに対してとても意欲的に取り組んでいらっしゃることがわかり、今後も当ゼミで協力できる部分があればしていければいいと思った。レビューの時期を12月以降にして、旅費を出してくださるならほかの地方にも行きます
4	元大臣にお会いするなど初めての経験だったので、自分が直接なにか深く話したわけではないが、すごく緊張したし本当に貴重な経験だと感じた。大臣は、前の国交省の方が話していた印象とはかなり違っていて、やはり政治家という感じがした（話し方、物腰、学生へ話した内容など）。それから大臣がfacebookをやっているというのも知らなかったが、実際に私たちの訪問についても発信していて、割と国民に近いところで関われる可能性があるのだなと思った。
5	最初発表した時に、準備段階から時間が厳しいことや最初の予定から持ち時間が半分以下になったことを知らされ、あまり時間をとってはいけないという考えにとらわれてしまい早口になってしまったことが本当に悔やまれた。最後時間が変に余ってしまったのも自分のせいだと思う。せっかく任せてもらったのに失敗してしまい期待を裏切ってしまったこと、本当に申し訳ありませんでした。しかし、今回の失敗のおかげで自分はまだまだであることを改めて実感することができ、これからの成長の糧にできたかと思う。
6	選挙人名簿からの無作為抽出による地域でのレビュー開催が行われているなど新たな知見を得ることができました。それぞれ班で検討したアイデアもかなり好感触だったのは素直にうれしかったです。また2年生がどうどうと河野前大臣と話ができていたのを見て今後のゼミも安泰かなと思いました。
7	河野先生は前回お会いした時と同じくエネルギッシュで活発に意見を交わしてくださる方であった。実際に今後も地方開催を進めていけそうか、その際の（赤井ゼミの）協力体制などを聞いていただき、二年生が必死に回答している姿が可愛らしかった。今後も河野先生との関わりを続けていけたらもっと面白いイベントを企画できそうだと思った。
8	河野前大臣は実現可能が難しいことでも、やれない理由よりもとにかくしてみようという姿勢のある方で身軽さを感じた。また、私たちが訪問したことをすぐにネットにあげるなど、行動力や実行力のある印象を受けた。学生の話なども丁寧に聞く一方で、豪快な発言もされていて人間としても面白く人を惹きつける方だと感じた。間近で、大臣や国会議員として活躍されてる方の話をきくことはないので、議員の方がどのようなこと考えていて、そのために何をしているのかその一端をうかがい知ることができて勉強になった。また、議員会館に入らせていただくのは初めてのことだったので、純粋に感激でした。

9	前とは言え大臣を目の前にするということで、とても緊張しましたし、その場の空気も緊張感を含んでいたように感じましたが、いざ河野前大臣と意見交換をしてみると、とても気さくに話をしてくださって、議員たるもののカリスマ性のようなものを感じとることができました。大阪レビューが開催できたのも、河野前大臣の積極的な働きかけがあってこそであって、また、他の地域での地方レビュー開催にも意欲的なようだったので、ただの学生の戯言として片づけず意見を汲み取ってもらえるのはとてもありがたいことだと感じました。
10	<不参加のため省略>
11	行革大臣をおやめになったあとにも関わらず行革のことをいろいろと考えていらしゃって、器の大きいかただと思いました。昨年も感じたことですがテレビで見るのとキャラが変わらないので裏表のない方だと思いました。
12	「大阪レビュー」の開催に大きなお力添えを頂いた河野先生にご報告できたことは大変有意義なものであったと感じられた。現在は担当大臣でないのにも関わらず、レビューの改善に関心を持っておられる河野先生の姿からは政治家としての姿を感じられました。また、2回生も物おじせずしっかりと準備・発表しており、頼もしいと感じることが出来た。
13	改めて、大阪レビューの意義の大きさを知りました。今回は赤井先生主導のもと、ゼミ生が総出でお手伝いに入らせてもらいました。人手もノウハウも比較的そろった環境での実施であったため、次の開催地でも同じように行くかはわからないという点が地方開催の拡大には難点だとわかりました。学生の報告やレビューに関する感想や意見に河野前大臣が耳を傾けてくださり、次回の開催に向けてのアイディアにつなげていただいたことは非常に貴重な機会であり、政策を勉強する学生にとってはこれ以上ない学びの場だったと思います。
14	形式ばらず、ゼミ生にも気さくに応対をしてくださり、大阪レビューの実現もこのお人柄があってこそのことだったのだろうと感じた。行政官が実現性など実行段階に注目されるのに対し、政治家である大臣は成果の大きさ、効果やインパクトなどを気にされていると感じ、立場の違いによる考え方の違いを感じた。聞き手の立場に合わせ、発表のしかたを工夫することも大切だと思った。
15	大阪レビューを踏まえての意見交換会であったが、実際に経験して感じたことについて伝える機会を得られたのは貴重な経験だっと思う。今回の大阪でのレビューがきっかけとなって全国で広めるためのハードルについて伝えることが出来、またその対応策などについても議論できてよかった。失礼だが一点気になったのは、冗談だと思うが今後も赤井ゼミに協力してもらう、といった発言が大臣から出た時に、あまり持続的な意見ではないため、本気で続ける気はないのかなとも感じた。
16	大阪レビューに関して、非常に評判が良かったのでこのようなイベントを継続していきたいと大臣がおっしゃっていたので、今後もますますレビューが盛り上がっていけばと思う。地方開催に関しては、現段階では数件の応募があるそうだが、開催の決定次第、テーマや気になる論点などをその地域にアンケートをとるなりして地方開催の意義を出していけば、より有意義なレビューが開催できるだろうと思う。
17	大阪レビューを行ったときはこれでよかったのかと心配に思う面もあったのだが、河野さんからは非常に良かったと、評判になったのだという話の雰囲気が伝わってきて、赤井ゼミとして価値のあることをできたのだと実感できた。他方で、学生や地域の方をどのようにレビューに関心を持って参加してもらうかについてはまだまだ工夫の余地があるのだと改めて議論を通じて考えた。また、他の大学でレビューを行ったとしてもなかなかレビュー自体がよくわかっていないなど問題があるということで、難しとも思った。

学生番号	経済・財政一体改革推進委員会での発表で感じた事、学んだこと:：発表・議論の中で感じたこと など
1	質疑応答の時間がゆとりをもって設けられていたため、ISFJやWEST以上に詳細に論文に関してご指摘を頂けた点で有意義だった。お話を伺った心象では、水道事業の経営効率性向上に関しては、行政は自治体の理解・納得を第一の課題と考えているようだった。
2	実際にPFIを担当されている職員の方から貴重な意見をいただき、PFI推進には多くの障壁が存在することを再確認した。特に、民営化により安全性や災害時の対応が低下するのではという住民や議会の反対が大きいことを痛感した。
3	行政の決定が合理的であっても、政治的判断に阻まれることもあって事業の実現は困難な場合があるという意見をいただき、大変参考になった。今後実現性を高めていくためには、市民への周知や働きかけを進めていくことが重要なのだと思われる。
4	水道班の発表に対して、今までの発表ではあまり聞かなかったような意見が多かったと思った。やはり実務家目線での指摘は、今まで政策提言論文を色々と読んで、議論を聞いてきた中でも、一番大事なのに学生が忘れがちなところをついているものが多いなと感じた。
5	発表後の議論の中では、すでに大会で指摘されていたことも多く含まれており実務だからこそ何か特別な知識が必要であるわけではないことを感じ、自分たちがさらに努力しいていけば政治的なもの以外の指摘に関してはそれなりの対応が可能であることを知った。
6	多くの方から意見を頂戴することができた。特に、論文では触れなかった縮小・撤退については個人的に少し調べてみようかと思います。また水道だけでなく地域のインフラを一括で管理できるユーティリティープレーヤーの出現可能性という意見は新鮮で興味を抱きました。
7	経済財政の有識者の方々が実際に我々の水道事業の論文を聞いていただけたことに感謝した。有益なコメントを多く頂戴し、参考になった。特に成功事例をよく精査すること、将来に向けて民間の事業参入への心理的抵抗の軽減を早急に行うべきであると言うことを指摘していただき、我々の研究につながる示唆をいただけたことが嬉しかった。足立先生がたくさんしゃべっていたのが印象的だった。
8	正直なところ、経済・財政一体改革推進委員会の方々の威厳に圧倒され、非常に緊張し、頭が真っ白になっていました。今後の日本における水道やインフラ事業を職員の方がどのように考えているのかを知れて、勉強になりました。
9	客観的に聞いていた側の感想となってしまいますが、やはり政策を決定する政府側の意見だけではなく、政策を実施する自治体やその他関係者の意見など現場の声もとても大切にしているんだなという印象を受けました。

10	<不参加のため省略>
11	内閣府で進められているPFIの現状について施策を実際に講じている方々のご意見を伺うことができてとてもいい機会になりました。PFI事業は白書等でも重要視されているので、今後もPFIの活用が進んでいけばいいなと思いました。
12	水道班のみの発表であったが、有意義な時間を過ごすことが出来た。水道事業という1つの問題に関しても厚労省のみではなく内閣府など多くのアクターが関与していることを身をもって感じることが出来た。また、合併の際に水道料金の設定もネックになることなど実務者だからこそ見えてくる課題についてもお話を頂けた。
13	水道班の発表に対して、広域化の最適な大きさについてなど、実際に政策を進めるにあたっての具体的な議論がなされていたことが印象的でした。現状から理想的な状況に持っていくための分析を重ねて政策を提言したその先について、実務者の方の目線、考え方を勉強することが出来たように思います。
14	民営化・PFIの推進という立場から、その適応対象の一つとしての水道事業を考える方たちであったので、従来のゼミ性が発表していた立場とは逆からのアプローチである。それゆえ、ほかの事業との比較や地理など広い視野で考える視点に触れることができ、貴重な機会だった。
15	水道に関する発表のみを行ったかと思うが、折角大勢実務者がいる中での発表だったので、法改正など学生が調べるだけではわからないハードルについて新しい知見が得られるような議論ができればよかったと思う。
16	経済・財政一体改革推進委員会での発表の時もそうだったが、水道に関して、財務省、厚労省など組織を問わず、効率化を目指すことが望ましいという認識はどこも同じように持っているという印象を受けた。ただ、ここでも他国の失敗事例などが挙げられ議論になったことから、他国事例のリサーチをより入念に行っておくべきだったと感じた。
17	議論では大きく構えてどう政策を考えるのかという発想が土台となって進行が進んだと思う。なかなか政策提言論文を書く時点では突拍子もないことも書けないのでその点については難しいとも思うのだが、政府の会議などでは将来を見据えた政策案を議論するので、そういうもんかなとも感じた。また、水道をユーティリティとして扱うという議論など、後に話を伺った厚労省との立場との違いが見えておもしろかった。

学生番号	行革事務局での発表を通して感じたこと、学んだこと　:発表・議論で得られた・感じた事、今後の地方レビューの在り方に関して考えたこと など
1	提言に関するフィードバックは余り得られなかった印象だが、発言を伺っていると、レビューを閲覧する市民への説明が追い付いていないことを行政が課題として認識しているのが分かり、今後の提言の方向性について示唆的だったかもしれない。行政レビューに関する議題から離れて地方創生の話題が中心的になっていたが、教授や院生の知見（起業意欲のある若者がいたとしても労働集約型の産業への傾向が高い点、地方進学に対して無限定的に補助金等を出すことはコモンプール問題を誘発する懸念がある等）を垣間みることができた点、また大臣と議論をすることができた点で有意義だった。
2	今回の大阪レビューにおける反省点として、若者の参加率の悪さや宣伝広告の難しさ、地方開催らしい議題選択が挙げられた。地方開催らしい議題選択について、開催地域が先進的活動を行っている課題を選択することで改善されるのではないかと考える。先進事例を行っている地方自治体の職員に事業レビューへ参加していただくことで、現場で具体的にどのような活動が行われているか理解できる。（大阪レビューにおいて、大阪府が先進的取組を行っているPFIを取り上げたように）また、事前知識があまりなくても、参加しやすい行政事業レビューの在り方がいると感じた。（議論内容を簡単にまとめたスクリプトを配るんなど）
3	行革事務局にバラエティーに富んだ省庁出身の官僚の方々がいらっしゃるため、様々な意見が出されて案が豊富に生まれる可能性があることから今後どのように進められていくのかがとても楽しみだという印象を受けた。山本大臣からは行革というより地方創生のお話が多かったものの、地方創生の一助としてレビューを開催するなど、現在の職をフルに生かせば今後さらなる発展が見込まれると考えた。今後は「なぜ地方で開催するのか」を明確にしつつレビューを行えばさらに多くの市民の興味を引くことができると思う。
4	初めての発表でとても緊張した。大阪レビューについての発表だったが、大臣が来ていたり実際に大阪レビューで見かけた官僚の方がいたりして、本当に官僚が政策を上の人に提案するときはこんな感じなのかなと思った。また、私の中では「実現と実行は別の話」というお話が一番深く印象に残った。実際に施策が打たれた場合、もちろんマイナス効果もあるので、そこをきちんと解消しながら政策を実行していく必要がある、という趣旨のお話もあったが、普段政策提言論文を書いている私たちにとっては、本当によく考えなければならないポイントだと思う。
5	自分の発表部分は少なかったため、あまり役に立つことはできなかった。議論においては、阪大生のほうからはなかなか役に立つことは提案できなかったかと思うが、実務者の方からの意見はこれからのゼミ活動においても役に立つようなことばかりだった。ある方が最後におっしゃっていたように確かに阪大生を含め今の若者の知識量と向上心のなさは実感した。発表の中にもあまりよくないものが含まれていたようにも思う。今後の地方レビューに関しては、国民の関心を高めより多くの来場者を確保できるように国と地方がしっかりと連携し開催していただければと思う。
6	どの班もアイデア自体は結構面白いと個人的に思っていたので、その内容について議論を深めたかったが、地方創生の話になってしまったのは少し残念でした。実現可能性とか今後どういう方針でレビューをやっていくかということをもっと知りたかったです。ただ地方創生についても個人的に関心を持っていた分野だったので奨学金をインセンティブとして地方での就職を促すというアイデアについて意見を交わせたのはよかったとも思います。その中で大学で地方色をどう出していくのかというところがカギになるのではないかと思っているので就活が終わったら個人的にリサーチしてみようかと思います。
7	行革での発表では、山本大臣がテーマにこだわらず様々に質問していただき、活発な意見交換会ができたと感じた。確か地方大学の学生確保について話していたと思う。
8	霞が関や国政に親近感を感じられない地方にとって、行政事業レビューが地方で開催されることで、国政について知り、考える場として機能すると感じました。そこで、事業レビューにより国民が参加することができる枠組みを作ることによって、事業レビューに対する国民の興味や参加を促すことができるのではないかと考えました。たとえば、事業レビューのテーマの一部を公募制や国民による投票によって決定し、国民の興味のある内容を議論することで、より国民目線の事業レビューが可能だと感じます。また今回、実現が難しいものや奇抜なアイデアで練られていない部分もありましたが、大臣や行革の方に発表させていただくという貴重な経験ができて、本当によかったです。

9	現職大臣の目の前での発表ということで、今まで経験した論文大会に負けず劣らずとても緊張しました。議論の内容としては、私たちの発表のなかにあった地方レビューの広報についての提言について、前向きに受け止めていただけたことが印象的でした。また、山本大臣の方から、地方レビューと結びついたテーマである地方活性化について取り上げていただいて、Uターン・Iターンの当事者である学生という立場から考え意見をさせていただく機会となり、問題の根本的なところを議論することができたように思います。今後の地方レビューという点に関しては、大学でやるか地方自治体として開催するかによって、政府としても対応の仕方が変わってくるのかなと思います。大学で開催ということになれば、ぜひ大阪大学で開催した際の反省や改善点などを活かしていただいて、地方自治体が開催するとなれば、行革事務局とともに関わり方を考えていく必要があると思います。
10	<不参加のため省略>
11	大阪レビューに関わったものとして、今後のレビューのあり方を考える機会になってとてもよかったでえす。少ない期間でしたが、実際に市区町村単位でレビューを行っている市区町村に聞き取り調査も行うことができ、有意義な提言ができたのかなと思いました。
12	大阪レビューを踏まえて、今後の地方開催に向けた発表を行った。政策提言を日頃から行っている私たちからすると政策評価の場を身近に感じられる機会が存在することは非常にありがたいことであると感じる。今回の大阪レビューでは大学生向けの広報活動が展開されていたが、地方自治体や地元住民との連携は手薄でありそこに課題が残っているのではと考えた。地方自治体や地元テレビ局などとの連携も強化することで更に質の高いレビューが開催可能ではないかと思った。また、大臣との議論では地方大学の活性化のお話も頂いたが、地方レビューの大学開催もその一つの解決手段として位置づけることが出来るのではないかと考えた。
13	地方開催で取り上げる題材については、行革事務局の考え方とギャップがあるように思いました。「地方らしさ」と一言にいっても特色のある事業の選定には限界があること、また、一般市民が飛び入りで議論を聞いても理解できる内容であることは、実際困難であると感じました。「地方らしさ」というよりも、世間一般的に話題になっている題材に関連する事業を取り上げれば関心は高まるのではないかと思います。内容の難しさについては、提案にもあったように事前に学習シートを配布したり、副音声のような形で解説を付けることが出来ればいいと思いました。ニコ生のコメントのように、解説者の映像を同時に流す等できれば知識が十分でない一般の傍聴人にとっても聞きやすくなると思います。
14	地方開催への意気込みが感じられ、本当に開催されるのかわからなかった昨年とは雰囲気が変わったと感じた。また、学生の側も提案が実際に採用されたことから、責任をもってより良い提案をしようという気概が見え、例年より良い会になっていたと思う。前大臣・現大臣のレビューの認識が、「行政活動の向上・より有効な実施」に加え、「無駄削減の議論をするためのアリーナ」のような認識であることが気になった。一般の国民に訴える面は仕方ないが、事業仕分けと混同するなということも難しいだろう。また、実際にお手伝いをして感じたことを直接発表できる機会があり、大阪レビューに携わった甲斐があったと感じた。
15	3つの班がそれぞれ発表しているのをわきから聞いていただけではあるが、時間の制約もあってあまり踏み込んだ発表は出来なかったのかなと感じた。大勢の方に聞いてもらうので、例えば議論のテーマを創出するような発表を行い、それを踏まえて学生側と実務者側の両方から意見を出してもらうといった形式にしてもよいかと思う。あとは開催する曜日について、平日ならば人は集まりにくいが、休日に開催すれば休日出勤となる、というギャップがある、という話を聞いて、やはり大学の授業の一環として取り入れれば、それらの問題を解決する一助となるのではないかなと感じた。何か話題を絞って深く議論が出来るようになればよいと思う。
16	大阪レビュー実施時には、参加者（傍聴者）の意見も聞きつつ進めていく方がより有意義ではないかと感じていたが、国民に対して政策の説明の責任を負っているのは本来的には選挙によって選ばれた代表者としての政治家であり、行政が国民に対して積極的に説明をする立場にあるわけではないという考え方もあるので、実際に参加者（傍聴者）と意見を交わしながらレビューを進めていくのは難しいのかもしれないと感じた。ただし、ただ傍聴するだけならテレビやインターネット中継を見ても変わらないので、地方でやる意義があまりなくなってしまうようにも思う。開催に先立って一般参加者の意見を募集するなどの工夫はあってもいいかもしれない。
17	正直、地方創生の話をされたときはどうしようかと思った。学生の議論を聞いているのかと疑問に思った。また、大臣の関心にあった地方創生は非常に難しく、若者にすぐ起業を期待するのは的はずれな議論だと感じた（実際に、起業をしてそれなりに成功するような企業を作るのはある程度の就業経験や現場の経験をしたあとの30代以降、速くて20代後半の人だろう。）。また、私がレビューの告知時期を早めるほうがいいのではという意見を出したが、流されてしまった。学生の提言について議論が深まらず、地方創生や学生の就業の話がメインになってしまったのが残念だ。提言は非常に面白く、授業を通じてレビューを行う案などは良いのではないかと思った。

学生番号	厚生労働省への政策提言ツアーでの発表・議論から感じたこと、学んだこと：発表・議論で得られたもの（データで見る政策と、現場で見る政策など）、省庁のソフトの印象（担当者・対応）など
1	女性医師班の発表については広く深く指摘を頂き（別の内生変数の可能性の指摘等）、医療従事者の勤務環境に対する知見が深まった。水道班の発表については、水道法改正案が通常国会に提出される予定である点など、水道の民営化や広域化の推進の重要性について政府と論文とで方向性の合致が見られるも、行政の、生の踏み込んだ声をあまり伺えなかったのは少し残念である。
2	水道班の提言では、住民や議会など関係各所へPFI・広域化によるリスクをどのように除くか説得することが大きな問題になっていることを再認識した。一方で、法改正など実際に進行中の施策もあり、論文の方向性は間違っていなかったと感じた。厚生労働省に対しては、厚生労働省と一言で言っても、水道の公衆衛生から医療など社会福祉まで幅が広く専門性が高いと印象を受けた。
3	医療から社会資本まで、厚生労働省が実に幅広い分野を取り扱っているということを改めて確認させていただいた。実情把握の限界（受診率の定義）や費用対効果とQOLの優先順位など、政策を実施する際に多くの障壁が存在するものの、少しでも現状がよくなるように努力されていることが分かった。どうせなら厚労省の中で発表させていただきたかったが、それは次回の楽しみにしたい。
4	3つの論文に対して、実際に今はどうなっているのかのおはなしを各担当者の方に聞けてとても興味深かった。印象に残ったのは、女医班の際言われていた、「政策＝政治＋理論（＋財政）」というものだ。私たちは普段、基本的には「理論（＋財政）」の部分を大きく重点を置いて考えているが、やはり政策をする際には政治の理由が大きく縛りとしてあることもきちんと考慮に入れないといけないと思った。そのため、やはり「お金をかけない」ことは重要であるというのもよく理解できるし、地域差についても納得できた。また、厚労省の方々は、みなさん「できる人」という印象を持ったが、前日に話した大臣や行革の年齢層の少し高めな方々よりは、話しやすい印象だと感じた。
5	実務者だからこそ気づく視点も多くあり厳しい意見も多くいただき非常に勉強になった。ここで指摘されたことは来年度の発表にも役に立つものばかりであった。今年指摘されたことは来年度にはされないようにしっかりと来年の論文にも取り入れていきたいと思った。厚労省の方は一人はヒアリングでお世話になった方であり、優しいという印象を受けた。批判だけでなくいいところは評価していただき勉強になった。
6	論文では厚労省に対するヒアリングを行わなかったため、現状厚労省がどのような方針を持っているかぜひ聞きたいと思っていたが、その点は明確ではなかった気がする。今後こうします！みたいな話が聞きたかった。ただ、水道法の改正については今後どのような形で出てくるのか楽しみだと思った。論文についてはそこまで突っ込んだ話はされなかった。
7	全般的に論文の内容を評価していただけたので嬉しかった。実際に財政支援などの施策は今後も展開していきたいという話や、事業者間のしがらみに対しても都道府県の介入に積極的であるということをお伺いできたので、私たちがやってきたことが間違っていないのだなと感じ嬉しかった。もう少し突っ込んだ質問をして答えていただけたら良かったなと思う。
8	まず、自分たちが作った政策提言が厚生労働省の方に発表させていただけるということで非常に嬉しかったです。また、厚生労働省の水道担当の方の考え方が自分にとっては少し意外でした。今まで水道の民間活用に関して議論をする中では、水道もガスや電気と同じように民間活用することが望ましいというような意見を聞くことが多かったのですが、厚生労働省の方が水は人の生命に関わるものだから慎重に検討しなければならないと考えていらっしゃったのは想定外でした。国の職員という人の健康や生命を守る砦として、ものごと考えていらっしゃるのかなと個人的に感じました。全体的に厚生労働省の方は、人柄もソフトで柔軟な印象を抱きました。

9	発表している身として、さまざまな議論を通して自分の発表の弱いところというのはだいたいわかっているつもりではあったので、実際に政策を実施している厚労省の方に聞いてもらうというのは、怖いような気持ちもありましたが、もったいないくらいに好意的に評価していただいたような印象でした。しかし、それだけではなく、政策担当者として気をつけている視点（医師の数の問題だけでなく、質をどう測るかという問題等）についても教えていただくことができ、今後の活動にとって非常に有益な時間だったように思います。
10	実際に省庁に行って、自分たちが考えた論文、そして政策を発表し、コメントをいただく機会は大変貴重であり、学生の考えた政策が国に届く機会があるということは後輩たちの論文執筆のモチベーション向上や、1年生がゼミを選ぶ際にひとつのきっかけになると思いました。逆質問の時間が設けられていたことで、自分たちが疑問を感じながら論文を執筆していた、受診率の定義についてお話をうかがうことができて光栄でした。厚生労働省の方は自分たちの論文に興味を持って下さり、丁寧に対応して頂いたと思います。
11	自分達が考えた提言を、実際にその分野の最前線で働いていらっしゃるかたがたのまえで発表することができてとても有意義な時間になりました。自分達が感じていた問題点や課題を行政のかたがたと共有できてよかったです。実際の政策形成に関わる課長補佐級ほかのかたに自分達の提言を聞きにきてくださり大変うれしいです。
12	厚労省の方との議論では有意義な時間を過ごすことが出来ました。政策を定量的に分析できたことは評価していただくことは出来ましたが、本当に政策変数が被説明変数に直接影響を及ぼしているのかどうかなどのご指摘を頂きました。来年は、データーの制約上、考慮することが難しい部分についても議論を尽くせるようにアドバイスをしていきたいと感じました。また、厚労省の担当課の方からは、ヒアリング調査などの際にも温かく接していただき本当にお世話になりました。
13	がん検診の受診啓発について、これからの方向性を担当者の方と直に議論することが出来て実りある時間になりました。クーポン券事業について、限られた財源の中でいかに効果的に事業を運営していくかとの観点から事業内容の一部を変更すると伺い、やはり財政面の考慮が論文中で薄かったことを感じました。また、今回論文で変数に用いた施策等の他にも、変数に取り入れるべき数字があったのではないかとも感じました。（企業や特定健診に関する変数等）　担当者の方にはとても親身になって議論してくださりました。がん検診についてはデータが揃っていないことがおおく、今回の研究でも苦心したため、これからデータの収集が進んでより研究が進むことを期待したいです。
14	<不参加のため省略>
15	やはり水道は歴史も長く、難しい問題なのだと改めて感じた。また、民間活用について上水道の場合はなかなかノウハウ活用の余地が少ない、という点は前々から疑問に感じていた点なのでやはりそうか、と思わされた。財政支援について述べている部分が論文にはあるが、そのままの形で継続するべきなのか、それとも形を変えてより効率的な形を探るべきなのか、ということについて考えさせられた。
16	政策のメリットが定量的データとして示されないままになっていては、政策の是非は感情論・ひいてはイデオロギー論に終始してしまい、政治的要因によってうまく推進されなくなってしまうのも無理はないように思う。その点で、今回の研究によって、学部レベルではあるが、しっかりとした裏付けでもって政策の是非を議論できたことは意義のあることであったと思うし、実際にその点を実務の方にも評価していただけて良かった。ただし、海外では同じような政策が失敗した例もあるそうなので、そのあたりの事例研究も行うべきであったと感じた。
17	水道についての議論に関しては、非常に面白かった。公衆衛生を担うものとして水道を位置づける以上、民間に任せるのに抵抗があるのだという議論もあったのだが、それ以上に水道の価格をどう取り扱うかという点が興味深かった。女性医師の議論に関しては、厚生労働省の担当の方が留学帰りということで非常に勉強されていて、そうした知見が政策に取り入れられていくのだと感じることができた。他方で、「学者みたいな」ことをやっていてもダメだと発言されたときは、少し反論がしたくなった。個人的には、政治的な面に加え、エビデンスに基づく精緻な分析を考慮した政策形成が大事であると思う。

学生番号	財務省への政策提言での発表・議論から感じたこと、学んだこと：発表・議論で得られたもの（データで見る政策と、現場で見る政策など）、省庁のハードの印象・省庁のソフトの印象（担当者・対応）など
1	厚生労働省への提言と同様、専門的な指摘を頂くことができた。試算をはじめとする費用対効果や、政策の優先順位、等の指摘が多く出たのは印象的だった。
2	大阪府や厚生労働省への政策提言のときよりも、データ分析に対しての質問や指摘が多かったように感じた。（特に分析結果に対する解釈の仕方などについて）また、費用対効果や財政支援の仕方など政策に係る費用に関して、当然ではあるが厳しかった。財務省に対して、担当の方が全員男性であったことから、省としても男性が多いのかなという印象を受けた。また、一人の担当者の方が持つ仕事の範囲の幅広さに驚いた。
3	省庁の金庫番として、一貫して「費用対効果が重要であり、無駄はなるべく避けなければならない」という姿勢でコメントをしていらっしゃった点で厚労省との対比を見ることができたためとても興味深かった。分析の細かい点について詳しく説明を求められたため、普段から緊迫した気持ちで仕事にあたっているのだろうということを認識できた。
4	財務省では、他の省庁よりもデータや分析、また実際の効果にかなり重点を置いている印象を持った。もちろん、各政策に対して予算をつける立場におられるので当然だとは思うが、結果と費用対効果を重視されている感じが、どうにもやはり他の省庁とは違う異質な固い空気感を醸し出していた。ここで印象に残ったのは「公平性」についてのお話である。負担の公平性、補助する際の公平性など…もちろん、国民全体の利益になるように政策を実行していくことを考えたら、より多くの人が公平に利益を被ることのできるようなものに大きく予算をつける、というような視点も大切なのかなと思った。
5	水道班の時に説明変数で強調が一切されていなかった「補助率」に焦点を当てた方がいてさすが財務省だととても感動した。論文においても財政的な面は触れにくいことではあるがあえて多くの指摘をいただき勉強になった。財務省の建物などハードが古く、働く場所としての第一印象はマイナス。ソフト面に関しては皆さん気さくな感じが伝わりいい印象を持った。
6	<不参加のため省略>
7	財務省での発表は、まさに批判的な視点で論文を評価していただけて論文の執筆を1年間続けてきて良かったと感じた。民間ノウハウの限界といった問題点や、料金値上げについての言及の有無など我々の想定していた質問をぶつけてくれたことによってさらに論文に対する自身も持てた。それ以外にも私たちの想定できていなかった最適規模についてなど教えていただけたので今後の課題としたい。
8	私たちの発表に対して、的確かつわかりやすい言葉で論点の弱いところなどを物腰柔らかくご指摘いただき、非常に勉強になりました。雰囲気の良さと頭の良さを兼ね備えた方々で、自分もそのようになりたいと思いました。 また、財務省の方の思考は、提案に対して予算をつけるかという視点で、今までの自分があまり意識していなかったものなので参考になりました。個人的に心に残っているの「水道は段階的に状況が悪くなっているから、なかなか改革に踏み切らないのではないか」という言葉です。まさに自分たちが水道事業を通じて感じていた今後の日本が対処しなければならない問題そのものであると思いました。段階的に緩やかに人口が減少し、悪化していく中で、今後どのような未来を目指し、この難しい問題に自分が将来行政官になって立ち向かうっていきたいと改めて感じました。

9	財務省の担当の方というのは、政策を担当している省庁の方よりも、多くの政策を担当している分、それぞれの分野に広く知識をもっているのに対して深掘りはしていないイメージがありましたが、いただいた指摘が的確で、印象が改まりました。加えて、財務省としてデータで見える政策の実状をしっかり把握されており、医師の絶対数不足というより政府では医師の偏在を問題視しているといった話もありました。今後論文を書く際には、やはり政府の方針・見方と一致した形で現状分析を作れるのが一番かなという感想をもちました。
10	まず、厚生労働省の方と財務省の方は見るところが違うな、ということを肌で感じることができました。具体的には、厚生労働省の方からはあまり質問されなかった、因果関係や相関関係、地域差の話などの分析についての話を質問されたことです。また、政策を評価する際に、ただ単に政策実行にかかったお金による費用対効果を見るだけではなく、公平性を見ているところが、各省庁、各政策に予算を分配している財務省ならではだと感じました。財務省の方の質問はきつく聞こえましたが、予算を組む立場としては当然なのだと思います。
11	自分達が考えた提言を、実際にその分野の最前線で働いていらっしゃるかたがたのまえで発表することができてとても有意義な時間になりました。厚生労働省のかたがたとは違う、財務省のかたがた ならではの視点で指摘をもらえて良かったです。
12	主計局の方からは政策の効果的な実施という観点から非常に有意義なご指摘を頂いた。特に印象に残っている点としては政策実施の際、体制の構築と金銭的な補助を切り離して考えるべきだとご指摘を受けた事だ。現状、社会問題が存在する根本的な原因を考慮してどちらの解決策が望ましいかを考えるべきでだとの指摘は的確で説得力のあるものであった。今回頂いたご指摘に関しては来年以降の論文の執筆にも生かしていきたい。
13	私たちが考えて試算した「効果」と、財務省の方々が考える「効果」が違ったことが印象的でした。ただ金銭的なプラスマイナスの話をするのではなく、検診によるプラスの効果を強調した方が、財務のプロの方には響いたのかもしれないと思いました。また、QOLの向上など、数字で測れない効果をどのような基準で考慮に入れるのか、という点についてもっとお話を伺いたいと思いました。予算をつけるにあたって慎重な調査を重ねるポイントなのだろうなと感じました。
14	<不参加のため省略>
15	やはり如何に効率化するか、という点については我々よりも長く、深く考えておられるな、と思わされた。今回の発表では効率化によって持続性を追求、という形ではあったが、一つの形としては水道料金にも注目してもよかったのかと考えさせられた。印象については、大会でも指摘されなかった分析の細かいところまで指摘していただいたり、提言一つひとつを吟味していただいたりと、とても真剣に向き合っていくださり貴重な経験であったと思う。
16	効率化の重視や強い財源意識など、財務省らしいなと感じるご意見を多くいただいた印象がある。 国民感情としては、財源が政治的要因によって無駄遣いされて財政が悪化しているという認識を持っている人がまだ多いように思うので、そういった国民感情を払しょくできなければ消費税の増税は政治的に難しいように思う。水道に関しても同じで、水道料金を上げなければ持たないのは目に見えていても、まずはしっかりと効率化を行わなければ、料金を上げて赤字補てんに頼らない持続可能な水道経営を行うことは難しいと改めて感じた。
17	財務省の方がOmitted Variableや逆因果、見せかけの相関などの「内生性」の点について非常に関心を持って質疑応答に望まれていたことが非常に印象的であった。実証研究において、こういった内生性についてかなりの注意が払われているが、実務においてもそのような実態があるのだとわかったことは収穫であった。実際上、今回の学部生の研究では内生性の部分で怪しいような分析もあったとおもう。また見せかけの相関を指摘されていたが、そうではないと反論できた部分もあったと思う。そういったそれぞれのどの部分のどこまでが限界でどこまでができているのか、学部生にわかってもらうことが来年のTAとして必要な部分だと感じた。

４．政策提言ツアー実施の効果：企画者のコメント

2013 年度に政策提言論文の全国大会にゼミ論文をエントリーし、その成果を実際に霞ヶ関での政策担当者に見てもらいコメントをもらうという「政策提言ツアー」を開始して、今年 2016 年度で 4 年目となる。毎年、財務省をはじめ、政策に関わる担当の省庁のみなさまには、大変お忙しいところ、若い学生のチャレンジの応援という形で、お時間を作っていただいている。本当にうれしい限りである。この経験をした学生が、社会に出て、社会問題に直面したときに、民間部門であれ公的部門であれ、この経験が役に立つことがあると確信している。それでこそ、企画者および対応していただいた皆様への恩返しとなるのである。継続のための調整には時間もかかるし苦労も多いが、学生の成長があってこそ、やりがいがある。継続は力なり。